

新・瘠我慢の説

経済学者
渡辺利夫

第十八回 自己承認欲求について

世界の「七つの海」を支配するイギリスが極東の小国日本と同盟を結ぶにいたったのはどうしてか。その契機となったのが義和団事件の平定に際して、日本の将卒がみせた規律と勇猛に対するイギリス側の高い評価であった。

義和団の乱は明治三十二年（一八九九）に山東省で発生、つづいて乱徒は北清地域を席卷、天津を経て北京に迫り、各国公使館が集中する北京城内の外国人居留地域を包圍、列国公使団が清国政府に対して義和団の取り締まりを要求。ところが西太后は義和団を乱徒ではなく「攘夷の義民」とす

る方針を取り、清国兵を投入さえして外国人討伐の挙に出た。亡国的な行為であった。

ここで八カ国が連合軍を編成した。しかし外国人居留地域は敵に完全に包圍され、連合軍の兵站も尽きて万事休すとなった。日本公使館書記生の杉山彬、次いでドイツ在清公使のフォン・ケッテラーが殺害された。事態の容易ならざるを察した日本は派遣隊を相次いで出兵させた。これに勢いを得た連合軍は通州を占領、さらに日本軍を先頭に定福庄へと前進して北京城攻撃のための布陣を敷いた。日本軍が朝陽門街道の以西、ロシア軍が以

南、米英軍がさらにその南に陣を張った。明治三十三年（一九〇〇）八月十四日未明に日本軍の一隊が朝陽門に達してこれを爆破、場内に突入、翌日かつぎょうに公使館区域に到着、乱徒を追い払い居留民を救出して乱は鎮定された。

連合軍と乱徒との攻防戦において最高の武勲を立てた人物が、在清公使館付武官の中佐・柴五郎であった。日清戦争に従軍ののち、在英公使館付武官を経て北京の公使館勤務となり、この間に義和団事件に遭遇。乱徒の鎮圧に水際立みずぎわだった采配を振るった。のちの日露戦争においても勇名を馳はせ、大正八年には陸軍大将にまで上りつめた帝国陸軍を代表する指揮官の一人であった。

柴の一生を深い哀切をこめて描いた名作に、村上兵衛の『守城の人』がある。北京公使館区域防衛の要に位置する肅親王府に陣を張り、無数の敵軍に囲まれて狼狽うたえる連合軍と居留民のなかに立って鮮やかな攻守の機略をみせた「天性の軍人」の姿が活写されている。村上には柴の指揮下に入ったB・シ

ンプソンという当時二十三歳のイギリス人義勇兵に次のように語らせている。

「数十人の義勇兵を補佐として持っただけの小勢の日本軍は王府の高い壁の守備にあたっていた。その壁はどこまでも延々とつづき、それを守るには少なくとも五百名の兵を必要とした。しかし、日本軍は素晴らしい指揮官に恵まれていた。公使館付武官のリュートナン・コロネル・シバである。彼は、他の日本人と同様、ぶざままで硬直した足をしているが、真剣そのもので、もうすでに出来ることと出来ないことの見境みまがひをつけていた。ぼくは長時間かけて、各国受け持ちの部署を見て廻ったものだが、ぼくはここではじめて組織されている集団を見た。この小男こおとこはいつの間にか混乱を秩序へとまとめていた。彼は部下たちを組織化し、さらに大勢の軍人たちを召集して、前線を強化していた。実のところ彼はなすべきことをすべてやった。ぼくは自分ですでにこの小男に傾斜いんせつしていることを感じる。ぼくは間もなく彼の奴隷になってもいいと思う

ようになるだろう」

ロンドンタイムズの従軍記者ジョージ・モリソンは、義和団事件の鎮定は日本兵の武勲なくしては不可能であったと評し、ウィクトリア女王は柴に勲章を授与した。日英同盟なくして日本の興廢を決するのちの日露戦争での勝利はなかったであろう。

日英同盟交渉が開始されたのは、義和団事件が決着した年の翌明治三十三年（一九〇〇）の秋からであった。春秋の筆法をもつてすれば、柴五郎こそが日英同盟を成立させる直接的なきっかけをつくり、この同盟の成立によって日本は日露戦争に勝利することができたということになろう。

のちに駐清公使として義和団事件処理の全権を与えられて北京に赴任したのが小村寿太郎である。小村は外務大臣の青木周蔵に対して次のように進言したという。

「事変の最終解決に際し、欧州協同の外に置か
る、ことなからしめんが、我国はその兵力並びに
清国に於ける陸海軍の行動に於て、終始少なくと

も最強国と均等を保有せざるべからず」

「我国に対して若しこの好機に乗じ列国と懇切なる共同の精神を以て敏活且確實なる举措を執るに於ては、清国問題を解決するの際、欧州諸国の間に立ちて優勢を制するを得べしと信ず」（外務省日本外交文書デジタルコレクション「小村外交史上巻」）

いかにすれば列強の一員として迎えられるか。往時の日本外交の最大課題であった。小村の進言は、その強い自己承認欲求を鮮明に表している。実際、日本は幕末期以来、領事裁判権を認めさせられ、関税自主権を剝奪されるといふ屈辱的な不平等条約をアメリカのみならずオランダ、ロシア、イギリス、フランスと結ばされていた。日清戦争が日本の勝利に傾いてようやくイギリスが、勝利後にはアメリカなどが治外法権を撤廃した。

しかし関税自主権については日露戦争勝利後まで待たねばならなかった。列強との不平等条約改正に日本は明治の全期間を要したのである。大日

